

東西文明の比較 (13)

陽光新聞社・顧問
塩澤宏宣

今から約1万5千年前、北と南から来た「祖先」が日本列島で巡り逢い縄文時代が始まりました。1万年以上続いた縄文時代は平等であり、平和でした。「史記」によれば、そのような平和な列島に秦の始皇帝によって派遣されたとされる徐福の一行(男女3000人余)が移り住み、彼らが「稲作・青銅器・鉄器」などを中国から持ち込んだことが想定されます。

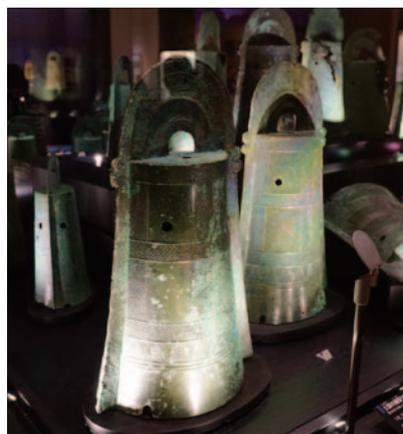
おりしも中国では、粟や麦の畑作を中心とする北の文明と、米を中心とする南の文明が衝突する「春秋戦国時代(紀元前8世紀～同3世紀)」でした。その長い争いに敗れた南

の文明の人々が、難民となって四方に拡散したと伝えられています。それら難民の一部も、日本列島へたどり着いたと考えられます。彼ら渡来人は、縄文人の作った「漁労・狩猟・採集」を中心とする縄文文化に区切りをつけました。弥生文化の誕生です。以後の時代区分(一般的)は、めまぐるしく変化します。

- ▲弥生時代(紀元前数世紀～紀元3世紀中頃)
- ▲古墳時代(3世紀中頃～7世紀)
- ▲飛鳥時代(592年～710年)
- ▲奈良時代(710年～794年)
- ▲平安時代(794年～1184年)



登呂遺跡の復元高床式倉庫 (画像はGoogle Panoramio)



加茂岩倉遺跡から出土した銅鐸 (ウィキペディアより)

……というように。

稲作・鉄器の伝来は、集団間による戦いの始まり

鉄器の登場で石器は駆逐されました。初期の鉄器は、木製の農機具を作るための加工具でしたが、その後には「鉄製の武器」へと変化しました。前回の記事で徐福伝説では「徐福は、稲など五穀の種と百工をもたせた」と述べましたが、その百工のなかに製鉄技術者や武器の製造者がいたことは間違いないのでは。

また、渡来の人々は春秋戦国時代を過ごしてきたということが考えられます。つまり、争うことを知っていたということです。「勝者は潤い、敗者は死か逃亡」という争いから逃れてきた民です。争いごとを知る民と鉄器(武器)。平和な生活しか知らない縄文人は、渡来人を前にして、大混乱したことは容易に想像できます。

権力者の誕生と、その支配

「稲作の始まりは、集団間による戦いの始まりである」と言われます。縄文時代では、竪穴住居がいくつか集まって“ムラ”をかたちづくっていました。しかし、厳密な共同体ではありません。それが、農業共同体の時代になると、土地を支配・管理するリーダー(首長)が必要になります。また、米は貯蔵が出来るので、豊作者が富むという格差が生まれます。ここに私有財産という観念が生まれます。更に、富者は鉄器(農機具・武器)を所有し、その他の農民の上に立つようになりました。縄文時代にはいなかった「権力者」が誕生したのです。

弥生時代の登呂遺跡^注

弥生時代の水田址は全国で20カ所以上発見され

ています。なかでも有名なのが、静岡県の登呂遺跡です。遺跡は住居址、水田址、森林址の三つの部分からなっています。登呂遺跡には12戸の竪穴住居址と2戸の高床式倉庫址があります。水田

址は住居に隣接する沼地にあり、総面積は約7万平方メートル、杭や板で畦をつくり、約40の田んぼに区切られています。

この登呂“ムラ”は、弥生時代後期(紀元100～200年)に存在しました。住民は60人ぐらいでしょう。遺品は、木鋤・田下駄・田舟・堅杵などの木製品です。この時代の稲刈りは、現代とは異なり、石包丁で「穂摘み」をしていました。そして「穂摘み」は女性の仕事でした。縄文の頃、女性は、木の実拾いやユリの根掘りなどの「採集」をやっていましたが「採集」が「穂積」になったのでしょうか。そのかわりに「漁労・狩猟」は男性の仕事でした。

高床式倉庫は、富める人の象徴

米は、漁労・狩猟の捕獲物に比べて貯蔵が容易です。「もてる者」と「もたざる者」の差がでます。高床式倉庫の出現は、私的所有による階級社会誕生の第一歩となったと考えられます。

銅剣・銅鉞・銅鐸は、なにを語るのか

弥生時代には、鉄器とともに青銅器も伝播されました。かつては、銅剣は中国地方の文化圏、銅鉞は九州・四国地方の文化圏、銅鐸は近畿・東海地方の文化圏といわれてきました。しかし、1984年から翌年にかけて新たな発見がありました。

島根県簸川郡斐川町の荒神谷遺跡から358本の銅剣と6個の銅鐸と16本の銅鉞が出土しました。更に近隣の加茂岩倉遺跡からも39個の銅鐸が見つかりました。3種の青銅器が併存していたことが分かりました。次に銅剣・銅鉞・銅鐸について触れてみます。

銅剣：銅剣は中国・四国地方などに分布。儀式などで使用されるにつれ大型化したものと考えられ、形も徐々に変化しました。現在では、作成時期により3種類に分けています。初期は「細形」、中期が「中細形」、後期が「平形」と分類されています。滋賀県の上御殿遺跡で出土した双環柄頭短剣は、中国華北や内モンゴルに分布するオールドス式銅剣に似ており、朝鮮半島から出土していないことから、中国から日本海ルートで流入した可能性があります。

銅鉞：銅矛ともいいます。日本には朝鮮半島から入ったと思われます。弥生時代中期頃から九州のみ

で生産されていました。その後、銅剣や銅戈などのようにしだいに大型化し、祭器化します。型式は、年代的に細形から中細形・中広形・広形の順で変化しました。

- ①狭鋒細形銅鉞
- ②狭鋒中細形銅鉞
- ③狭鋒中広形銅鉞
- ④狭鋒広形銅鉞

銅鐸の役割：「鐸」とは、古代中国の柄付きの青銅製の楽器を言います。上部が開口しており、下側の柄を持ち、もう一報の手に持った棒で鐸を打ち鳴らしました。年代に応じて、形や大きさに変化が見られます。

- ①最古段階の鐸：菱環鈕式りょうかんちゅうしき
- ②古段階の鐸：外縁付鈕式がいえんつきちゅうしき
- ③中段階の鐸：扁平鈕式へんぺいちゅうしき
- ④新段階の鐸：突線鈕式とつせんちゅうしき

古い段階の鐸は、摩耗状態から実際につるして鳴らされたようですが、新しい段階の鐸は大きくて鳴らす楽器としては使うことが出来なかったと思われる。「聞く銅鐸」から「見る銅鐸」に変化したようです。銅鐸は、集落を離れた奇怪な場所から発掘されます。そのことから「見る銅鐸」の裏側(使用目的)が考えられます。

まず、銅鐸は祭りに使用され、終わった後、山中に埋めた。翌年掘り起こして使用後、また埋める。それを繰り返したが、その風習がなくなり忘れられた、という考えがあります。

次の意見は、やはり祭りに使われたが、用済みの祭器として山中に埋め納めた。三つ目の意見は、銅鐸は地霊・穀霊の依代(神が宿るモノ)だというもの。大地に埋めて神霊を鎮め、掘り出して地上で祀るという考えがあります。私は、最後の意見?に賛成ですが、いかがなものでしょうか。

今回は“ムラ”から“クニ”の誕生について、書いてみたいと思います。

注) とろ登呂遺跡：静岡県にある、弥生時代の集落・水田遺跡。国の特別史跡に指定されている。弥生時代後期に属し、1世紀ごろの集落と推定される。

(ウィキペディアより)